

韓国における西洋史研究

60年の回顧と展望

安秉稷（アン・ビュンジク）

金侖姫（訳）

1 現在の状況

韓国に西洋の歴史が紹介されはじめたのは19世紀末頃、いわゆる「開化期」からであると言えるだろう。19世紀末の韓国の「開化期」は、封建的伝統を一新し、近代的な改革を目指す動きが現れた時期である。この時期には、近代的な教育機関として新設された中等学校のいくつかでは西洋史が教えられはじめ、西洋の歴史に関する数種類の書籍が出版された⁽¹⁾。

開化期に現れた西洋の歴史への関心は、韓国では新しい現象であったという点で注目に値するが、それ自体が韓国における西洋史学の誕生を意味するのではない。この時期の西洋史教育や西洋史に関する出版物は、まだ学問的な研究に基づくものではなかった。韓国において、専門の研究者によって本格的な西洋史研究がはじめられたのは、それよりも約半世紀のちの時点、すなわち韓国が日本の植民地支配から解放された1945年以降だと言えるだろう。

ならば、「開化期」と「解放」の間の時期——つまり日本の植民地支配に該当する期間——が、韓国における西洋史学の発展にいかなる意味をもっていたのか、という問題が提起されるだろう。日本による植民地支配の影響には2つの面があった。ひとつは否定的な面である。植民地支配の期間、韓国では西洋史についての研究と教育が忌避され、禁止された。ごく例外的な場合を除いて、西洋史は学校でも教育科目として採択されず、日本が韓国に設立した最高教育機

(1) 当時出版された西洋史の書籍としては、世界史に該当する『萬國略史』（1895年）をはじめとして、それぞれロシア、米国、ポーランドの歴史を扱った『俄國略史』（1898年）、『美國獨立史』（1899年）、『波蘭末年戰史』（1899年）、そしてナポレオン（Napoléon）体制、ビスマルク（Bismarck）、ピョートル（Пётр）体制、マッツィーニ（Mazzini）、ガリバルディ（Garibaldi）、カヴール（Cavour）等の伝記を扱った『拿破崙傳』（1905年）、『比斯麥傳』（1906年）、『彼得大帝傳』（1907年）、『伊太利建國三傑傳』（1907年）などを挙げることができる。金米漢「韓国の西洋史研究——傾向と評価」『西洋史論』、95号（2007年12月）12-13頁参照。一方、これらの書籍の書名は、内容を構成している西洋史の知識の大部分が、中国から取り入れたものであることを窺わせる。

関である京城帝国大学でも、韓国史や東洋史とは異なり、西洋史の専攻は設置されることはなかった。

他方で、植民地支配の期間は、「解放」以後の発展の準備期間であったと言えるだろう。この時期に日本へ留学した韓国人の中から大学で西洋史を専攻する者が現れはじめ、彼らは「解放」以後、韓国の西洋史学を先導する先駆者としての役割を果たすことになった。このような西洋史学を専攻する専門的な研究者が輩出されたという面を考慮するなら、日本の植民地支配は、結果的に韓国西洋史学の礎が築かれる契機となったと言えるだろう。

1945年の「解放」を起点として捉えた場合、1つの学問分野としての西洋史学が韓国に誕生してから、今や60年余りになる。「解放」以降、今日までの韓国における西洋史学の発展を顧みるとき、その成長のめざましさは注目に値する。それは、何よりも研究者数の増加に顕著に表れている。「解放」直後、西洋史の研究者は、それこそ指を折って数えられるほどの少数にすぎなかったが、今では「韓国西洋史学会」に加入している正式会員の数だけでも500余名に達している。研究者数の増加とともに、研究活動も活性化・多様化した。例えば、草創期の10年間に生みだされた論文数は年平均4.5編にすぎなかったが、最近では毎年300編以上の論文が発表されている。また、「解放」以降の長い間、主として西ヨーロッパとアメリカに限定されていた研究領域も、今では南ヨーロッパ、東ヨーロッパ、ロシア、中南米などへ拡大された。それにともない、西洋史研究者の学術団体も多様化した。1957年に韓国西洋史学会が設立されたのち、西洋史研究者による学会組織としてはそれが唯一のものであったが、1980年代末以降、時代史や地域史といった領域別に、多様な分科学会や研究会が登場している。⁽²⁾

「解放」以後、60年の年輪を刻んだ韓国西洋史学界の発展の諸相と現在の状況については、別紙の〈表1〉「韓国の西洋史研究者の現在の状況」(2007年度)⁽³⁾と〈表2〉「韓国西洋史学界の研究業績の変化(1995-2006年)」⁽⁴⁾で、より詳細な情報を提示したい。〈表1〉は、2007年度現在、韓国学術振興財団に登録された博士号の学位所有者のうち、西洋史を専攻する約350余名を選び、専門分野と年齢別に分類したものである。〈表2〉は「韓国歴史学会」が、平均して2年に1回の頻度で集計している西洋史分野の研究業績を、より詳細な専攻分野別に分類したものである。言うまでもなく、これらの図表は単なる参考資料にすぎない。統計資料の抽出や分類が完璧を期せないため、図表上の数値は必ずしも統計的な正確性を完全に保証するものではない。しかし、これらの図表は、韓国における西洋史学界の動向と現在の状況の概略を調査するには役立つだろう。

(2) 西洋古代歴史文化学会(1997年)、西洋中世史学会(1996年)、英国史学会(1991年)、フランス史学会(1998年)、ドイツ史学会(2001年)、アメリカ史学会(1989年)、ロシア史学会(2006年)、イベロアメリカ史研究会(2007年)、文化史学会(2000年)など計9の学会に、多いところでは100名余り、少ないところでは20-30余名の会員が加入して活動中である。

(3) 李泰叔「総説——韓国西洋史学の範囲」『西洋史論』95号(2007年)、150頁。

(4) 1995-2004年の統計は、李泰叔「総説——韓国西洋史学の範囲」『西洋史論』95号(2007年)、156頁に基づき作成した。2005-2006年の統計は、『西洋史論』95号(2007年)に収録された専攻分野別報告に集計された数字を用いた。

出生年度	専攻	1940～ 1950	1951～ 1955	1956～ 1960	1961～ 1965	1966～ 1970	1971～ 1973	合計
古代		1	4	7	10	3	0	25(7%)
中世		3	6	8	10	1	2	30(8%)
イギリス		3	9	6	11	3	4	36(11%)
フランス		4	4	11	13	8	1	41(12%)
ドイツ		4	8	16	15	10	1	54(15%)
イタリア		0	0	1	2	2	0	5(1%)
米国		2	9	14	10	2	1	38(11%)
ロシア、東欧		1	4	6	16	13	0	40(12%)
スペイン、ラテンアメリカ		0	1	1	6	2	0	10(3%)
思想、歴史理論		3	11	12	9	11	4	50(14%)
その他、不明		3	3	5	4	4	1	20(6%)
合計		24(7%)	59(17%)	87(25%)	106(30%)	59(17%)	14(4%)	349(100%)

表1 韓国の西洋史研究者の現在の状況 (2007年度)

年度	専攻	1995～ 1997	1998	1999～ 2000	2001～ 2002	2003～ 2004	2005～ 2006	合計
古代		40	25	34	51	64	72	286(10.7%)
中世		61	15	46	37	66	54	279(10.4%)
イギリス		71	25	36	53	77	79	341(12.8%)
フランス、イタリア		74	30	51	66	93	114	428(16.0%)
ドイツ		27	20	19	120	80	103	369(13.8%)
ロシア		26	31	41	17	42	39	196(7.3%)
米国		78	24	60	64	80	66	372(13.9%)
スペイン、ラテンアメリカ					7	23	18	48(1.8%)
歴史理論、思想史		25	34	36	110	70	80	355(13.3%)
合計		402	204	323	525	595	625	2,674(100.0%)

表2 韓国西洋史学界の研究業績の変化 (1995-2006年度)

まず〈表1〉を見ると、専攻者数において、時代史別の観点からは、古代史と中世史の比重が非常に低いという点、そして地域別専攻の点では、ドイツ史専攻が最も多いことが目をひく。ドイツ史の専攻者数が統計的に首位を占めているのは、あるいは意外かもしれない。〈表2〉に表れているように、ドイツ史の分野での研究活動が特別に活発だというわけでもないからである。古代史と中世史の場合から分かるように、専攻者数と研究業績が必ずしも対応しているわけではない。

〈表1〉の年齢別分布も注目に値するだろう。抽出資料の範囲が多少制限的ではあるが、韓国西洋史学界の世代別構成を扱っている点で興味深い。1950年度生まれを基準として、それ

以後の出生者を5年ごとの単位の年齢集団別に分類したこの表によると、1950年以前生まれの研究者数（7%）に比べ、それ以後の生まれの集団はそれぞれ2倍（17%）、3倍（25%）、4倍（30%）以上も増加したことになる。そして、1950年代後半から60年代後半までの時期に生まれ、現在の年齢ではおよそ40代に該当する研究者が全体の半数を超えており（55%）、その中でも特に40代前半の年齢層が全体の30%に達し、最も大きな比重を占めている。特異なことがらとして指摘できるのは、この年齢集団をピークとして、研究者数が急減している点である。30代後半は17%、30代前半は4%に過ぎない。30代前半とは異なり30代後半の場合は、その年齢を考えると、今後も博士号の学位取得者の数が大きく増加することはないと思われる。したがって、研究者の人的な構成の観点からは、韓国西洋史学界の発展は現在の40代前半の研究者集団を中心として、ひとまず頂点に達したのだと推定できるだろう。

2 発展の諸相

先述した西洋史研究者の年齢別の構成比は、韓国における西洋史学の発展の過程で現れた特徴的な現象の1つであると言えるだろう。その点で、「解放」以後今日までの、韓国西洋史学の発展の諸相を調査する際には、時期別に区分し、より詳細に検討する必要がある。西洋史研究者の人的構成や研究動向の観点から概観するならば、過去60年あまりの期間は、およそ3つの時期に大別することが可能である。(1) 1945年から1970年代末までの期間、(2) 1980年から1990年代前半までの期間、そして、(3) 1990年代後半から現在までの期間がそれぞれの時期区分に該当する。

第1の時期は1950年代末を境として、さらに2つの時期に区分することが可能である。その場合、前半期はまさに韓国西洋史学の草創期に該当する。この時期は、韓国西洋史学界の第1世代が主に活動をおこなった時期であり、第1章で先述したように、彼らは植民地支配の期間に日本で大学教育を受けた経験をもつ先駆者たちであった。彼らは、エリートとして、解放以降、韓国の主要大学で西洋史に関する研究と教育を担当しつつ、1957年には「韓国西洋史学会」を創設し、翌1958年に学会誌『西洋史論』を創刊して、韓国西洋史学の発展の礎を築いた。

第1の時期の後半に該当する時期、すなわち1960年代と70年代には第2世代の研究者たちが学界の表舞台で活動した時期であると言えるだろう。おもに1920年代に誕生した第2世代の研究者たちは、年齢としては第1世代に比べいくぶん年少であったため、活動が遅れたが、第1世代の大多数と同じく、日本統治時代に日本や韓国で中等教育を受けた経験をもつ。第1世代の研究者とともに、彼らは韓国西洋史学の開拓者だと言えるだろう。彼らは、韓国において、当時は前人未踏の地であった、西洋史の分野のなかでの特定の時代史や地域史を個別に専攻として選択し、専門的な研究に着手し、大学では後学の養成に努めることによって韓国西洋史学の発展に大きな影響を与えたのである。彼らが活動していた時期に、西洋史学を専攻する研究者の数と業績は着実に増加した。1960年度以前に輩出された西洋史分野の修士号の学位所持

者はわずか 25 名にすぎなかったが、1980 年になると 180 名に達し、1 名も存在しなかった博士号の学位所持者も 30 名近くになった。1960 年以前には年平均 5-6 編に過ぎなかった論文数も、1970 年代末には年平均 50 編あまりに増加し、学術書と翻訳書の出版も活発におこなわれた。

ところで、「解放」以後、韓国西洋史学を開拓した第 1・第 2 世代の研究者には、学問的関心の所在と傾向において注目すべき点が指摘できる。彼らが学問的情熱を傾けたのは、西洋史の特定の主題であった。例をあげるなら、古代アテナイの民主政、ローマ共和制、宗教改革、イギリスの清教徒革命・名誉革命、フランス革命、アメリカ革命、プロイセン改革、1848-49 年のドイツの 3 月革命などである。このような主題の選択は、意識的にせよ無意識的にせよ、当時の韓国社会の現実に対する問題意識を、ある程度反映していた。換言するなら、近代化を早くに成し遂げた西洋の歴史のなかに、自由と民主主義の発展、近代的な市民社会の展開と民族統一のための示唆となる点を探求しようとする試みであったと言えるだろう。

第 2 の時期、すなわち 1980 年代から 1990 年代前半の時期は、韓国西洋史学の発展が本格的な軌道にのった時期だと言えるだろう。この時期には多くの変化が生じた。まず研究者の世代交代が進展した点が指摘できる。この期間に、これまで韓国西洋史学を先導してきた開拓者世代が定年退職を迎え、それにともない学界の表舞台から退くことによって、新しい世代が活動を開始した。この新しい世代に関して特記すべきは、欧米の大学で学位を取得した研究者が本格的に登場しはじめた点であろう。「解放」後、第 2 世代までの研究者は、日本以外の海外に留学した西洋史の専攻者は極めて例外的な少数にすぎなかった。これに対して、1980 年代以降の新世代の研究者には、アメリカやヨーロッパの大学に少なくとも 5 年以上の長期間の留学を経験し、そこで博士号の学位を取得する現象が目立った。これは、西洋史を専門的に専攻するためには現地での教育と生活の経験が必要であるという認識の高まりであるとともに、海外での長期の留学が韓国の大学で求職する際に競争力を高めるという現実との相互作用の結果でもあった。

1980 年代以後の変化に関しては、研究者の数的な増加も見落とすわけにはいかない。1970 年代までに開拓者世代が養成した後続の世代が、1980 年代以降、専門の研究者として成長し、西洋史研究に合流しはじめたのである。加えて、1980 年代は韓国の大学が全般的な拡大を迎えた時期であった。各大学が入学定員と教授職を増やしたために、西洋史専任教員数も増加した。そして、研究者数の増加とともに研究業績も増加をみた。1980 年代前半の期間には年平均 60 編の水準であった研究業績は着実に増加し、1980 年代末には 100 編、1990 年代の前半期には 150 編の水準を超えることになった。

しかし、単に研究業績数の増加のみが重要なのではない。むしろ研究動向の変化こそ注目されるべきである。従来、韓国の西洋史研究はおもに政治史と思想史あるいは制度史に重点を置いていたが、この時期になると社会史が新たに主流となる研究動向として登場してきた。この社会史の台頭という現象には、言うまでもなく欧米の学界の影響が大きく作用していた。1980 年代から

1990年代前半の時期に、韓国の西洋史学界では欧米の学界の社会史理論と研究成果が集中的に紹介されている。例えば、ブローデル (F. Braudel)、ホブズボーム (E. Hobsbawm)、トムソン (E.P. Thompson)、コッカ (J. Kocka) など、ヨーロッパの著名な社会史家の著作がひろく読まれ、また翻訳も行われた。

このような社会史に対する関心の広がりや、韓国の現実を反映したものであった。韓国社会の産業化にともなって現れた社会的不平等や経済的対立の深刻化、労働運動の進展、権威主義的な支配に抵抗する民衆運動の台頭などが、社会階級や社会政策、そして社会運動などを主題とした社会史研究に目を向けることに寄与したのである。1987年に開催された韓国西洋史学会創立30周年記念シンポジウムの主題が、「19世紀の西洋社会と労働階級の形成」であり、1991年に開催された第1回韓国西洋史学全国学術大会の主題が「社会主義運動の歴史の変遷」であったのは、産業社会の社会問題と階級対立に対する、当時の韓国西洋史学界の問題意識をよく表している。

1990年代後半から現在までの第3の時期は、「解放」以降の期間に、学問の一分野として定着した韓国の西洋史学が、もう一段階、飛躍を迎えた時期であると言えるだろう。この飛躍をよく表しているのは、驚くほどの研究業績の増加である。1995年から2007年までの研究業績の数は、「解放」以降の50年間に蓄積された数を上回るほどであり、その量的な膨張はまさに注目に値しよう。この研究業績の急増という現象は、研究者数の増加によるというより、個々の研究者による研究活動が活性化された結果だと考えられる。そこには、各大学や韓国学術振興財団などが、研究活動に対する評価体制を強化し、その際、計量化された研究業績に基づき評価を行なう方針が影響を与えている。

もちろん、この期間をつうじて研究者数は増加しつづけた。特に、海外への留学によって学位を取得して帰国する研究者は毎年絶えることがなく、それ以前の時期に比較して、その数はさらに増加した。これらの海外留学生に、国内の大学で輩出する研究者の人数が加わることで、博士号の学位を有する西洋史の専攻者は、第3の時期では、国内の大学における人的な需要では到底満たすことのできない飽和状態にまで達している。西洋史分野で博士号の学位を有し国内の大学で専任教員として活動している研究者数は2007年現在で、218名程度と推定されるが、これは350名近く存在する博士号の学位所有者全体のなかで、約60%の水準である。このように韓国で西洋史分野での博士号の学位所有者が直面している就業難は、西洋史研究者の人員補充の面で、否定的な影響を及ぼしている。国内の各大学で大学院に進学し、西洋史を専攻しようとする後学の世代は顕著に減少している。したがって、今後、研究者数の増加をこれ以上期待するのは難しいと考えられるのである。

この飛躍の時期における西洋史研究の活性化を表すものとして理解できるもう1つの現象は、研究領域の拡大であろう。「解放」以後、しばらくの期間は、研究領域は、地域としては西ヨーロッパの数カ国とアメリカに限定されていたが、1980-90年代を経過するうちに、ロシア、ポーランド、イタリア、スペイン、メキシコなどへと着実に裾野を広げてきた。このように、研究者数の増加とともに、個別の専攻が多様化し研究が専門化する現象は、1990年代から2000年

代に引き継がれ、西洋史学の内部に新しい多様な学問分野が徐々に形成されるとともに、具体的な成果となって結実している。

この飛躍期には、研究の動向にも、それ以前に比較して明らかに変化が生じた。今回も変化の背景には欧米の学会の動向が存在していた。欧米の学会において白熱した論争を巻き起こしたポストモダニズムの思潮が、1990年代後半になると韓国西洋史学界にも本格的に紹介されたのである。それとともに、いわゆる「新文化史」(New Cultural History)、「日常史」(Alltagsgeschichte)、「ミクロストリア」(Microhistory)、「言語論的転回」(linguistic turn)、「記憶」といった用語が含意している、欧米の歴史学における多くの新しい研究動向が詳細に分析され、議論された。とりわけ欧米の学会で注目された主要な研究成果については、翻訳作業が活発におこなわれた。⁽⁵⁾

これに対して、1990年代以後、韓国の西洋史学界では社会史に対する関心が全般的に衰退する傾向にあると言えるだろう。産業化、都市化、近代化など、マクロな構造と大きな変化の過程を扱う社会史研究が減少する一方、社会的生活における人間の認識と経験を反映する文化や日常に関わる研究テーマが増加している状況にある。また、民族や階級に替わってジェンダーや人種問題についての研究は活発におこなわれ、集合的記憶についての研究が浮上している現象も、同じ文脈から、言及に値するだろう。⁽⁶⁾

1990年代半ば以降の飛躍期に韓国西洋史学に登場した新たな動向のうち、もう1つ注目されるのは、いわゆる「ヨーロッパ中心主義 (Eurocentrism)」についての議論である。2001年の第6回韓国西洋史学全国学術大会、2006年第11回大会、そして2007年韓国西洋史学会創立50周年記念国際学術大会の主題が、それぞれ「西洋文明と人種主義」、「われわれにとっての西洋とは何か——ヨーロッパ中心主義西洋史を越えて」、「東アジアにおける西洋史研究——近代性の認識とヨーロッパ中心主義の克服」であったという事実からは、ヨーロッパ中心主義という問題に対する韓国西洋史学界の関心が、いかほどのものであったのか推測できるだろう。ヨーロッパ中心主義という問題が韓国西洋史学界で本格的に議論の開始にあたって、1990年代から近年までに翻訳・出版された、サイード (E. Said) の『オリエンタリズム』(Orientalism)、

(5) 翻訳された著作の代表的なものとして、ル＝ロワ＝ラデュリ (Le Roy- Ladurie) の『モンタイユ』(Montaillou)、ギンズブルグ (C. Ginzburg) の『チーズとうじ虫』(The Cheese and the Worms)、ダーントン (R. Darnton) の『猫の大虐殺』(The Great Cat Massacre)、デイビス (N. Z. Davis) の『マルタン・ゲールの帰還』(The Return of Martin Gurre)、アリエス (Ph. Ariès) とデュビー (G. Duby) が編集した『私生活の歴史』(Histoire de la vie privée) などが挙げられる。

(6) 筆者は2007年、韓国のある出版社の依頼を受けて、最近10年あまりの間に韓国西洋史学界で発表された学術論文17編を精選して単行本として出版したことがあるが、この本(『韓国の知識志向度: 西洋史』、冊世上、2007年)に収録された論文の題目の一部を次に列挙したい。「ローマ帝政初期(1-2世紀)上流層の婚姻と婚外関係——実態と言説」、「国家アイデンティティの形成——チューダー朝イギリスの地図」、「イーストエンド、近くて遠い場所」、「フランス 雄鳥の波瀾万丈な旅程」、「2005年フランスの「騒擾事件」とムスリム系移民の統合問題」、「ナチス体制下での日常における同意と抵抗」、「他文化認識の可能性と限界——世紀転換期のドイツにおけるイスラム学者たちの「イスラム文化」認識を中心に」、「平等」の言説と人種差別の政治——ブラウン事件を中心に」、「コココーラの広告と米国の消費文化、1886-1939年」

フランク (A.G. Frank) の『リオリエント』(ReOrient)、バーナル (M. Bernal) の『ブラック・アテナ』(Black Athena) などの著作は大きな影響を及ぼしている。しかし、特筆すべきは、すでに 1980 年代から韓国西洋史学界の一部では、いわゆる「世界システム論」をつうじてヨーロッパ中心主義を批判するウォーラステイン (I. Wallerstein) の著作が非常に高い人気を博していたという事実である。

ヨーロッパ中心主義についての議論は、「解放」から 60 年が経過した韓国西洋史学界に現れた最も大きな変化のうちの 1 つだと言えるだろう。草創期と開拓期、そして学問分野としての定着期に至るまで、長期間、韓国の西洋史研究者の大多数は、西洋文明を普遍的な価値として受容しようと努めてきたのであり、とりわけ近代西洋を韓国社会が目指す近代化のモデルだと考えてきたのである。反面、近年では韓国の西洋史研究者の中には、西洋は、もはや韓国の未来にはなりえないと信じる者が多くなった。彼らはヨーロッパ史をむしろ批判的な観点から見直さねばならず、ヨーロッパ文明の意味を相対化する必要があると考えている。そればかりではなく、彼らは韓国が、西洋史学に対する際に、これまでヨーロッパ中心主義的な視点を無意識的に受容し、それに無批判的に追従してきたと批判し、これからはヨーロッパ中心主義を脱却し、「独自の」観点から、ヨーロッパ史と世界史を再構成する作業に取り組みねばならない、主張している。つまり、ヨーロッパ中心主義に対する批判が、韓国西洋史学の正統性と自己認識について、根本的な疑問を提起しているのである。無論、ヨーロッパ中心主義に対する視点は一枚岩的なものではなく、韓国の西洋史学界の内部には違いが存在している。しかしながら、こういった議論がなされること自体が、韓国の西洋史学の成熟を表す 1 つの証拠ではあるだろう。

3 課題と展望

過去 60 年の間、韓国の西洋史学は劣悪というほかない条件のもとにあっても、明らかに多くのことを達成してきた。しかしながら、今日の西洋史研究が置かれている状況は、決して十分に満足できるものではない。むしろ韓国の西洋史学は、現在、さまざまな面で深刻な問題に直面しており、今後克服しなければならない課題として、多くの問題点を抱えている。

われわれが直面している問題点の 1 つは、後続世代の養成の困難さである。韓国社会において「人文学の危機」という言葉が登場して、すでに 10 年以上が経過したが、西洋史学はこの危機の真っ只中にある。大学に入学する学生たちは、全般的な傾向として人文学の専攻を避け、英語を除く、西洋の他の言語を学ぼうとはしない。このような傾向の結果、大学では西洋文学と同様に西洋史教育の立場は大きく揺らいでいる。グローバリゼーションを日常の現実として経験しつつも、西洋の歴史と文化についての関心は衰退しているのである。

韓国の西洋史学が直面しているもう 1 つの深刻な問題は、韓国の学問研究の風土に関係がある。欧米の学界の場合、学問分野の発展には隣接諸学とのコミュニケーションと交流が必須であると、はるか以前から広く認識されている。特に社会史の台頭以降、欧米の歴史学の研究動向は、社会学、人類学、民俗学、心理学などの隣接諸学についての関心と理解が歴史学研究にとっ

て、いかに重要であるのかをよく表している。その点で、学問分野の間で、相互の断絶と孤立が目立つ韓国の現実には実に嘆かわしい。歴史学の場合、事態はなお一層深刻である。韓国の歴史学は韓国史、東洋史、西洋史に分かれており、この3分化された構造が、相互のコミュニケーションと交流を困難にする堅固な境界と城壁となって立ちはだかっている。その結果、隣接諸学はおろか歴史学の内部においてさえ、真摯で生産的な学問的な相互の対話が存在しない。学問的なコミュニケーションを妨げているこの閉鎖的で孤立的な構造は、韓国史、東洋史、西洋史という専攻を問わず、韓国の歴史学の発展を致命的なまでに阻害しているのであるが、いまだに変えることのできない絶対的な制度として存続している。しかしながら、この歴史学の3分化された構造は、国際的に比較するならば、一般的というよりはむしろ例外的で特異であると言うほかなく、その解体こそが、西洋史を含む韓国の歴史学にとって解決が急がれる当面の課題である。

学問的な対話と交流という観点からすれば、韓国の西洋史学が達成した成果の表れの1つとして見なせる個別の学問分野における発展も、必ずしも望ましい面ばかりではない。学問分野の細分化は、専攻領域における専門的でより詳細な研究のため寄与するところが多いだろうが、西洋史全般についての幅広い観点と問題意識を育てるためには、あまりその助けにはなっていないからである。当然のことながら、専門分野の細分化は、学問の専門化傾向にあっては不可避であると言えよう。しかしながら、学問分野の1つとしての韓国の西洋史学がもつ特殊性、すなわち時間的にも空間的にも広範囲な研究領域に比較して、研究者数が極めて制限されているという事実を見過ごしてはならない。この点を考慮するならば、西洋史の場合には、他のどの学問分野にもまして、細分化された専攻の研究者たちの中で専門分野を越境する知的な関心とコミュニケーションが求められていると言えよう。

ところで、もし、かりにこのような専攻の細分化と研究の専門化という現象が、研究の精緻化をつうじて西洋史研究の質的な水準を高めるのに貢献したとするならば、専攻分野間の交流の問題点についても、ある程度まで割り引いて評価できるかもしれない。しかしながら、この点についても、そうであると明確に断言することは難しいと思われる。厳しい目で省みるならば、むしろ、その成果に対しても懐疑的にならざるをえない。研究者数や業績の増加といった外面上の成長に劣らないほど、内実のある研究が行なわれてきたのか、60年以上にわたって蓄積された研究業績のうち、国際学会の基準に照らしても遜色のない研究が果たしてどれほどあるのか、自信がもてない。そう考えるならば、研究水準の質的な向上こそ、韓国の西洋史学が今後解決しなければならない最も本質的な課題だと言えらるだろう。

この60年以上の間、韓国の西洋史研究者が、西洋史における自由主義、民族主義、市民革命、福祉国家、社会主義、労働運動など、韓国社会の現実に照らしあわせて適合性のあるさまざまな主題を選択し、研究に真摯に邁進してきたことは言うまでもない。にもかかわらず、一般的に彼らの研究は学問的な創造性を確保することができず、特に史料の不足などの現実的な条件による制限によって、欧米の学界の研究成果に依存する水準に留まっている。産業化や民主化などの韓国社会の発展の過程において欧米社会が発展モデルの1つであったように、欧米の学

間も同様の役割を果たしたことになる。

したがって、近年のヨーロッパ中心主義についての議論から見て取れるように、韓国の西洋史学が、長きに渡って欧米の学界の研究動向と研究成果を無批判に受容することに汲々としてきたという批判の声が上がったのは十分に理解できる。そういった批判は、韓国の西洋史学の不十分な研究水準を考慮するとき、謙虚に受け入れ自己反省の契機としなければならないだろう。しかし他方で、ヨーロッパ中心主義からの脱却を要求するこの声には、憂慮し警戒すべき部分がある。それは、歴史学をはじめとした欧米の学問を単純にヨーロッパ中心主義というイデオロギーの産物として理解する傾向である。もちろん、欧米の学問には、ヨーロッパ中心主義的な視点と思考が根強く内在しており、現在まで世界史の叙述体系がヨーロッパ中心に偏っているという指摘は間違ったものではない。しかしながら、欧米の学問を、今後も学ぶべき模範としてではなく単に批判されるべき対象として定義することには問題がある。何よりも「ヨーロッパ中心主義」に対する批判が、欧米の学界の内部から提起されたとする事実そのものによって、欧米の学界の評価に関わる多くのことがらが示唆されている。それは、批判的でありながらも柔軟な思考、関心の多様性と創造性、知的な開放性と交流などの点において欧米の歴史学が依然として韓国の西洋史学が見習わねばならない1つの手本だということであり、現在もなお欧米の学界の動向に注目しその成果を学ぶ必要があるということである。一言で言うならば、ヨーロッパ中心主義に対する批判が行き過ぎるあまり、欧米の学界の知的な成果を否定したり、過小評価したりする愚行を犯してはならないということである。

したがって、ヨーロッパ中心主義を克服するために、西洋史を観る独自の視点を確立することが、韓国の西洋史学の課題であるという主張も批判的に検討する必要がある。何よりも「独自の視点」とは何を意味し、それをどのように確立するのか、まったくはっきりしていない。ヨーロッパ中心主義についての批判は、それに対する代案の提示をともなっていないのである。もちろん、ヨーロッパ中心主義に対する批判者のなかには、「トランスナショナル」(transnational)や「グローバル」(global)な視点からアプローチする新しい歴史を、既存のヨーロッパ中心主義の歴史に対する代案として提示する者も存在する。近年の欧米の学界で議論されているこの新しい動向は、ヨーロッパ史の意味を相対化しヨーロッパと非ヨーロッパ世界の関連性と相互作用に注目しつつ、新しい歴史認識を試みているという点では、それなりに意味を認められるだろう。しかし、そのような試みをつうじて、今までよりも西洋の歴史の特性への理解を深め、世界史の流れをより良く叙述することが可能であると断言するのはまだ難しい。この点において、それが既存の歴史叙述に対する補完という役割を越え、果たして代案の1つとなりうるかどうかは、疑問であると言うほかない。いずれにせよ、適切な克服の方法や代案を提示できずにいるヨーロッパ中心主義に対する批判が、韓国の西洋史学の独自性への主張として続けられるのは危険である。韓国の西洋史学界の一部で主張されている独自の視点というものは、ややもすれば自己中心的で偏狭なものになってしまいやすく、自生的な学問というものも、孤立して閉鎖的なものへと転化しかねないからである。

実のところ、ヨーロッパ中心主義に関する韓国の西洋史学界の議論の一部を調査してみるな

ら、この困難な問題に対して、知的に真摯に取り組んだという形跡を見つけるのは、容易なことではない。一例として、ヨーロッパ中心主義について、韓国内での議論に多くの影響を与えたサイドの『オリエンタリズム』に対する反応が挙げられるだろう。ヨーロッパ中心主義に対する韓国の批判者がこの著作で注目しているのは、オリエンタリズムに対するサイドの痛烈な批判だけなのである。この批判とは別に巻末に収録されている、オリエンタリズムの克服に関するサイドの議論には関心が向けられていない。ヨーロッパ中心主義についてのさらに詳細な議論のためには、これを一度詳しく検討する必要がある。⁽⁷⁾

サイドは、彼の著作のなかで西洋とは異なる「東洋」を定義することによって、東洋を支配しようとする西洋の歪曲された東洋認識を批判しているが、彼もまたそれを克服し代替することができる方法を十分に提示できていないとは言えない。すなわち、彼は知識 (knowledge) と権力 (power) との密接な関連性を見抜き、権力と結びついた知識の歪曲された姿を指摘しているが、権力にとらわれない新しい知識のあり方については、明確な答えをだしていない。彼は、ただ「どのようにすれば他人に対する操作と支配を意味しない自由な立場で、異文化と異民族を研究することが可能なのか」と問うているだけである。

にもかかわらず、オリエンタリズムに関するサイドの議論は、ヨーロッパ中心主義の克服という問題に関して吟味する価値が十分にある。サイドは、確かにオリエンタリズムに対する代案を積極的に提示できてはいないが、少なくとも、それに対する解答がオクシデンタリズム (Occidentalism) ではあり得ない点についてははっきりと釘を刺している。「想像された」西洋についての定型化された認識としてのオクシデンタリズムは、オリエンタリズムの対応物なのであり、両者の言説のイデオロギー的な性格を考察しても、オリエンタリズムと何ら異なる存在ではないというのである。

そうだとしても、韓国西洋史学界の一部で主張されているように、ヨーロッパ中心から抜けだし独自の視点で西洋を観ようという立場をオクシデンタリズムと同一視することは可能なのだろうか。人種的、文化的な優越意識を巧妙に隠蔽している西洋の学問の知識体系から脱却しようとする知的な試みを、すぐさまオクシデンタリズムとして定義するのは正しくないとも言える。しかし、その境界がどこにあるのかは全く明らかでない。サイドによれば、人間を「われわれ」と「他者」(the Other) に分割する際には、すでに価値判断が内包されており、「他者」についての知識は、「他者」を支配しようとする力と結びついている。知的な探究の対象として西洋を「他者」と定義し、「われわれ」と厳密に区分するのは問題があるというのが、まさにサイドの主張なのである。

このようなサイドの論理を受け入れるならば、西洋を観る視点において韓国の西洋史学が追究しなければならない何らかの規範が存在すると考えてはならないだろう。規範とは権威を

(7) 以下の叙述は「ドイツとはわれわれにとって何なのか」を主題として掲げ、2002年度韓国ドイツ史学会創立1周年記念学術大会で筆者が発表した文章の中の一部を要約したものである。安秉稷「国内ドイツ史研究の回顧と展望」、『ドイツ研究——歴史、社会、文化』、第4号(2002年)、26-44頁。一方、以下サイドについての言及では個別の脚注は省略した。

意味し、権威はオリエンタリズムと同様、正典（canon）化されたテキストとその引用をつうじて現実とは無関係に定型化された認識を生み出すのみであるからである。韓国の西洋史研究者がヨーロッパ中心主義と向かいあってゆく道は、集団的に合意し追従する1つの対抗的な権威をつくり出すことにあるのではない。それはむしろ、個々の研究者が、その時その時の自分自身の研究においてヨーロッパ中心の視点を抜け出す道を絶えず模索し試みることにある。換言すれば、ヨーロッパ中心主義を克服するために韓国の西洋史研究者にとって必要とされるのは、不断の批判精神と問題意識なのであり、規範的で普遍的な1つのパラダイムではないのである。ヨーロッパ中心主義に対する批判的言説は、サイドが憂慮しているように、西洋の探究に普遍的に適用することが可能な新しい主流となる言説、あるいは正統の言説に変化してしまってはならない。

オリエンタリズムとオクシデンタリズムとの間のディレンマから抜け出す道とは、一体何であるかという問題について、サイドの議論は1つの解決の糸口を指し示している。オリエンタリズムに対する批判において、サイドは探究する対象の「区別」（classification）と「分類」（categorization）という範疇的な認識方法自体をまず問題と見なし、対象を新たに認識する方法を模索しているように思われる。そして彼は、「われわれは異文化をいかに表象することが可能なのか」、あるいは「異文化とは何か」という質問を投げかけている。かりに認識対象を範疇にしたがって区別し分類しないかぎり、対象の相違を認識できる方法がないとすれば、サイドの立場には多くの問題があるだろう。しかしながら、サイドが問題としているのは、対象を互いに異なる存在として区別し認識すること自体ではなく、むしろ対象の相違を定型化して1つの範疇として絶対化することなのである。1つの範疇が絶対化するとき、われわれは認識対象を、常にわれわれとは異なる「馴染みのない」存在、すなわち「他者」としてのみ認識し、対象を常に「他者」としてのみ認識するとき、対象の本質を看過し歪曲することになる、と言うのである。

サイドの立場をもう少し具体的に説明するなら、人間についての認識と探究は、人種、民族、宗教、性などのように「他者」と「われわれ」の差別性を強調する範疇から脱却し、人間としての存在と経験それ自体を対象とする必要がある、と言えよう。換言すれば、皮膚の色、宗教、言語、文化などをわれわれとは異なる「馴染みのない」人間であろうと、他人をわれわれとは異なる「他者」として区別するのではなく、人間としてわれわれと同一視し、彼らの経験を理解し共感しようとしなければならないということである。オリエンタリズムに対するサイドの批判の核心も、オリエンタリズムの誤謬とは「非科学的」であるというよりは、「非人間的」であるという点に存在する。それは、異質に見える地球上の一地域について、確固たる絶対者の立場から、人間の経験を人間のものとして見ようとはしない、ということの意味するからである。

オリエンタリズムに対する批判をつうじて、人間を人間それ自体として認識し尊重せよというメッセージを投げかけているサイドは、「研究者にとって人間の自由と覚醒にまさる規範はない」という点を強調している。かりに韓国の西洋史研究者がサイドのメッセージを受け

入れるならば、西洋についての探究は、まさに人間についての探究となるだろう。そして彼らにとっての西洋とは、彼らが区別し他者化すべき存在ではなく、馴染みのないものではあるが、理解し共感しようと努めなくてはならない別の人間的な存在となるだろう。

オリエンタリズムに対するサイドの批判を十分に理解するならば、現在、西洋の歴史を研究している韓国の歴史家が示すべき態度とはどのようなものなのか明らかになるだろう。イギリス出身でフランス史を専攻したリチャード・コップ (Richard Cobb) は、以前、自身の学問的道程を回顧した文章で、「第2のアイデンティティー」(second identity) について言及したことがある。⁽⁸⁾コップは、外国人として異国の歴史と文化に関する専門家になるための最も重要な前提とは、区別する境界線を越境することであると確信している。コップに拠れば、異国の歴史を研究し理解するためには、彼らの言語で話し、彼らの思考で考え、彼らの感情で感じなければならぬということになる。そして、コップは、フランス語を使用している時と英語を使用している時の自分は同一の存在ではなく、自分自身が(言語によって)指し示す事物も、もはや同一の事物ではないのだと言う。結局のところ、コップにとってフランス史の研究とは、イギリス人としてのアイデンティティーとは異なる新たなアイデンティティー、すなわち「第2のアイデンティティー」を獲得していく道のりであったことを意味している。

もちろん、誰もがコップの場合のように自我の二重性に十分に適応することはできないのかもしれない。場合によっては、2つの自我の間でアイデンティティーの分裂に陥り、どこにも所属することのできないアウトサイダーとして彷徨い、疎外感を体験する可能性もある。しかし、二重のアイデンティティーが分裂する代わりに調和をなし、弁証法的に統一されることは必ずしも不可能なことではないだろう。人間のアイデンティティーは所与のものではなく形成されるものであり、相互に競合する複数のアイデンティティーが並存しうる点を考えれば、自身の選択にしたがって、コップのように何ものにもとらわれない「孤独な狼」として自我の2つの領域を自由に往来することも可能であろう。

もし、韓国の西洋史研究者が二重のアイデンティティーの調和と統合に成功することができるならば、オリエンタリズムとオクシデンタリズムの対立というディレンマから抜け出す可能性が開かれるだろう。彼らの韓国的なアイデンティティーはオリエンタリズムのヨーロッパ中心主義を克服する批判精神と問題意識の土台となるであろうし、彼らの西洋的アイデンティティーは、オクシデンタリズムというまた別のイデオロギーから脱却することを可能にする洞察力と知的なバランス感覚を提供することになるだろう。このように考えるなら、韓国に生まれた西洋史研究者は、誰にも与えられていない幸運と祝福を享受しているのかも知れない。彼はたとえ孤独であったとしても自由であり得るのであり、自分自身こそ、人種、民族、言語、宗教などの人間を分けるあらゆる束縛から抜けだし、人間を人間自体として探究し理解することができるからである。

(8) Cobb, R., *A Second Identity. Essays on France and French History*, London: Oxford University Press, 1969.

【著者紹介】

アン・ビュンジク（安秉稷）、ソウル大学人文学部教授

1955年7月24日、韓国の釜山に生まれる。

1983年、ソウル大学の西洋史学科の修士課程を修了。1984-85年、水原大学に講師として勤務。

1986-91年間、コンラート・アデナウアー財団奨学生として博士論文奨学金を得て、西ドイツのビーレフェルト大学に留学。

1991年、同大学に提出した博士論文「手工業の伝統と社会階級の形成——フランクフルトにおける手工業の徒弟制度の社会史研究」によって博士号を取得。

1993年、母校ソウル大学の助教授に就任。2002年よりソウル大学教授として、同大学・大学院にてドイツ近代史・西洋史の講義・演習を担当。2004-2006年には、同大学人文学部の副学部長を務めた。

1999-2000年には、客員教授としてカリフォルニア大学バークレー校のドイツ・ヨーロッパ研究所において在外研究に従事するなど、豊富な海外経験をもつ。

主著『ヨーロッパにおける工業化と労働者階級の形成』（1997年）の他、編著として『歴史の現在——西ヨーロッパとアメリカ合衆国における歴史研究の新潮流』（1998年）、『「過去との和解——国際比較研究』（2005年）、『西洋史研究選集——近年の研究成果』（2007年）など多くの著作を発表。日本語に翻訳された論文としては、「韓国の西洋史研究における「記憶」の問題』『西洋史学』第226号、2007年が挙げられる。

数多くの著作・論文を精力的に発表する傍ら、韓国西洋史学会代表（2000-2002年）、『韓国史学雑誌』の編集委員（2002-2004年）を歴任するなど、韓国西洋史学界を代表する研究者として活躍中。

【解題】

本稿は、2008年6月21日に開催された第13回ワークショップ西洋史・大阪におけるアン・ビュンジク（安秉稷）ソウル大学人文学部教授による韓国語講演をもとに、著者が加筆した原稿の日本語翻訳版です。ワークショップ当日の講演の逐次通訳と原稿の翻訳は、韓国からの留学生、金命姫さん（大阪大学大学院文学研究科・日本学専門分野博士前期課程）に担当していただきました。

著者のアン・ビュンジク教授は、2008年5月から8月にかけて、大阪大学招聘研究員として、日本における第2次世界大戦の「記憶」の歴史化というご自身の研究テーマにそって、各地の資料館・博物館の第2次世界大戦の展示を中心に資料の収集と調査に従事されました。

今回、本誌のシリーズ特集「歴史学の国境」の趣旨に沿うようなドイツ史を専門としない日本の聴衆・読者にも関心が共有できるテーマでのご講演・ご寄稿をお願いしたところ、多忙なスケジュールにもかかわらず快諾いただけたことは望外の喜びです。

本稿は、韓国の西洋史研究の60年を回顧・展望するスケールの大きな論考です。

近年、西洋史研究の領域でも、日韓共同による学会の開催など学術交流が深まりつつあります。わが国では、これまでほとんど知られてこなかった韓国における西洋史研究の歴史的展開を的確に整理した本稿は、読者に包括的な情報を提供する点で、貴重な論考といえるでしょう。

日本統治時代に誕生した韓国の西洋史研究には、西洋史・東洋史・国史という3分割された史学科のシステムの存在や、日本留学経験をもつ「開拓者世代」による西洋史学研究の本格的な開始など、日本からの直接的な影響が認められます。

他方で、第2次世界大戦後の韓国の西洋史研究の潮流には、近代化のモデルとしての西欧社会への関心、異文化理解の対象としての西洋史研究への問題関心の移行、1980年代の世界システム論の受容、近年のグローバル・ヒストリーの新潮流など、わが国の戦後の西洋史研究の展開との共軌性も多く見られ、知識社会学の観点からも興味深い比較対象であると思われます。

韓国における西洋史研究の現状を見つめ、実証研究の進展による研究の細分化、「人文学の危機」にともなう西洋史研究の全般的な社会的意義の低下、隣接諸学との学際的なコミュニケーションの不足などの問題点を指摘する著者の真摯な批判は、同様の課題を抱えるわれわれにとっても無縁ではありません。その意味で、本稿は、韓国における西洋史研究の回顧と展望であると同時に、わが国の西洋史研究の過去と現在を映し出す鏡像でもあります。

(大阪大学大学院文学研究科博士後期課程学生 田中晶子)